

音の輪・音の和

2024年3月発行 No.14

特集 P.2-3

座談会「兵庫県音楽療法士会って、 どうやってできたの？」

▶ 初期のエピソードや促進事業について
ゲスト4人に詳しくお伺いしました



P.4

山口陽雄記念賞授賞式

▶ 池田智子会員にインタビューしました

P.4-5

2023年度事業報告Ⅰ

▶ 研修会・事例研究会

日々、
勉強中です!



P.5

あなたの町のセラピスト

▶ 日置暁子会員・土橋順子会員



P.6-7

2023年度事業報告Ⅱ

▶ 主催コンサート、依頼事業



P.8

楽器紹介、音楽の豆知識

▶ オーシャンドラム、身近な「サイン音」と「サイン音楽」



マンパワーに感謝と期待

理事長に就任し2年目になると、無我夢中から少し周りが見えてきました。会の運営、毎月の研修会、他団体との交渉、会員の情報把握、会の事業遂行等々。しかしながら、会員数234名の私たち兵庫県音楽療法士会を維持し、そして発展に向かうのはなかなか難しいと感じました。多くの諸団体も同様ではないかと思えます。当会も理事7名で団結し一生懸命進めておりますが、理事が頑張るだけでは上手く物事が進まないことも多くあります。もちろん大きな道筋は、会を任されている理事が行いますが、会員一人一人が何らかの形で運営に携わって

一般社団法人 兵庫県音楽療法士会 理事長 井上 恭子

.....
 してくれているからこそできることも多いのです。毎月の研修会での当番や、コンサートやイベントの準備、それぞれの係の仕事など、たくさんのマンパワーが結集して、当会を支えてってくれています。

.....
 コロナ禍により、人と人との関係が少しずつ変わってきています。会員も200名以上になりますと全員が顔見知りという訳にはいきませんが、音楽療法士として対象者に真摯に向き合う姿勢と同様に、これからの当会の活動にも、更に熱きパワーを持って取り組んでいきたいと考えています。

タイトルのような素朴な疑問や「何もないところから、先輩方はどうしてたのかな?」、また他県にはない行政とのつながり等々、兵庫県音楽療法士会の初期の様子や促進事業について、当時を知る方々にお話を伺いました。

参加者

- ◆ 渡邊 幸子 会員 ◆ 廣野 誠 氏
- ◆ 継岩 典子 会員 ◆ 鞘本 尚子 会員

初めて認定された27名で2002年
兵庫県音楽療法士会がスタート

渡邊：何をしたらいいのか、場所はどこののか、というところから始まりました。まず1期生が集まって、これからについて、話し合いの場を持ちました。会の名称は「兵庫県音楽療法士会」に決まり、運営委員が選出されました。その後は初代会長（堀 早苗氏）のご自宅で運営委員会を開き、色々な基盤が創られました。初代の運営委員会は深夜までの作業が連日続いたと聞いています。

第1回目の研修会は、会員の人脈で三宮の二宮神社をお借りしました。当時顧問でいらっしゃった故山口陽雄先生にお願いし、山口先生の音楽療法に対する想いや療法士に期待すること等をお話し頂きました。



渡邊 幸子 会員
<1期>

継岩：「会を作らないといけない」と言ってくださったのは山口先生でした。1期の認定式が終わって、これから先のことを迷っていた私たちに、山口先生が「ここで終わりじゃない。今ここで皆がバラバラになってしまったら音楽療法はだめになっていく。すぐに会（組織）を作りなさい。ここからスタートだ」と仰いました。私たちよりも10年、20年先を見据えてくださっていたのだと、今つくづく感じます。あの一言が無ければ、きっと発会はなかったのではないかと思います。



継岩 典子 会員
<1期>

発会当初のエピソード

渡邊：研修会の会場探しが大変でした。当初は県民会館をよく借りていましたが、会場によっては抽選があり、外れては次の会場を探す…ということがよくありました。コピー機もなく、近くの本屋さんで大量にコピーしていました。途中で一旦後ろの人に譲りながら（笑）。いつもキャリアバッグには大量の資料を入れて研修会に向かいました。あと、手書きの時代で、今みたいにパソコンメールに添付という訳にはいかず、FAXや待ち合わせでの原稿の受け渡し、そして電話連絡でやり取りをしていました。手間暇かけて労力が要りましたが、振り返ると懐かしい思い出です。毎月の研修会はほぼ全員参加していましたし、会員一人一人に「自分たちで作りに上げて

いくんだ」という使命感のようなものがあったように思います。発会時に月1回研修会をすることを決めてから、ずっと現在まで続けてこられているのは、兵庫県音楽療法士会の財産でもあり誇りに思います。

継岩：地域の音楽療法に関して言えば、兵庫県の東側と西側での温度差も感じていました。その頃、東側では音楽療法が少しずつ浸透してきつつあったのですが、西側ではまだ「音楽療法ってなに?」の状態でした。「音楽療法やったら病気が治るの?」「音楽ええなあ、ボランティアでやってよ」という声もあり、セッションの現場をお伺いしては何十件も断られました。

震災後のヒューマンケアの理念から
音楽療法導入促進事業が始まる

廣野：まず音楽療法の事業を始めるに至った経緯ですが、長年音楽療法を取り入れていた向陽病院の山口先生が当時の貝原俊民知事に音楽療法の事を提案されました。その当時兵庫県では、阪神・淡路大震災の経験を踏まえて、ヒューマンケア（医療・福祉分野を超えて、芸術・文化の面からアプローチをし、生きる力を呼び覚ます）が大事という理念がありました。丁度それが一致して音楽療法を普及させていこうということになりました。人材を育てる為に1999年から養成講座が始まり、2002年2月に1期生が認定されました。勉強して実践経験を持った方々に活躍していただき、音楽療法を普及させていく段階に入り、まずお試しで現場に導入していただく『出前普及活動事業』が始まりました。「“出前”ってという言葉は嫌だ」と療法士さんに言われたのを覚えています（笑）。きっかけ作りとしてこれを2～3年間実施して、本格的に施設に導入してもらえるような取り組みが必要だということで始まったのが『導入促進事業』でした。人材はいるが中々広まらないから、施設に補助して取り入れてもらうよう働きかけるという事業が他の職種で以前にもあったので、それを参考にしました。



廣野 誠 氏
<発会当時兵庫県職員として音楽療法の普及に携わる、現在兵庫県音楽療法士会監事>

—— 当時、施設はどんな反応でしたか？

廣野：事業のチラシを作って老健施設協会などに持っていき、配布をお願いしたり、協会の会合に出向いて説明をしたこともありましたが、反応は鈍いように感じました。「ボランティアで来てもらう分にはいいな」という

雰囲気、定期的に来てもらうとか雇用するとなると財源がないので、施設側には収入として入ってこないんです。補助事業があるならやってみようか、でも補助が受けられる期間が終わったらそこで終わりという感じでした。

—— 廣野さん個人として音楽療法の印象は？

廣野：音楽療法は色々な手法があって、わかりにくい印象があります。音楽は楽しくてすごく良いというのはわかるのですが、療法士の個性に左右される面もありますよね。音楽のもつ多様性や、療法士の個性を活かして実施する、という点が理学療法や作業療法との違いであり制度化されるのが難しい理由の1つでもあるのではないのでしょうか。

コーディネーターの立場から
促進事業のあれこれ

—— 施設からの反響はいかがでしたか？

鞘本：導入促進事業で県から半額補助してもらえるなら試してみたいと連絡が来る施設は多かったです。（当初1年半で150施設）でも補助期間が終わると、そこで終わる施設が山のようにありました。療法士には「金銭面もあると思うが、自身の力が足りていたかどうかの反省はきちんとしておかなければならない」という助言をすることもありました。

—— 施設と音楽療法士のマッチングは大変だったと思われませんが、いかがでしたでしょうか。

鞘本：希望施設の対象者は高齢者が多かったですし、身近な領域でもあるので（療法士の希望領域とは違って）1度は経験しておくよう勧めていました。あとは、長く続けてもらう為に通勤距離が遠くない現場を設定していました。とにかく続けることが大切。月1回でも覚えてくれる対象者もいますね。



鞘本 尚子 会員
<2期、音楽療法導入促進事業初代コーディネーター>

—— 音楽療法の実践とコーディネーターのお仕事を兼任していたのですね。

鞘本：事務的な作業は気分転換にもなっていました。事務所はなかったから襖を机代わりに会議したりしましたね。書類作成など大変なこともありましたが、人とのやりとりは好きですし、人と話をすると色々な意見が聞けます。コーディネーターとして療法士に日々言っていたのは「施設スタッフと仲良くなりなさい」ということです。雑談が出来る仲になっておくと、色々な情報や療法士への要望等も入ってきやすくなると思います。

—— 県のバックアップについて

鞘本：コーディネーターとして学会で発表したのですが、質問が多くありました。行政との繋がりは珍しいことですし、すごいこと。廣野さんも大変なご苦労だったと思います。

廣野：他の行政がやっていないことを、独自で手探りでやっていくというのは楽しいですよ。継岩：促進事業のバックアップは本当にありがたかったです。施設にチラシを持って行った際も、県のバックアップがあると反応が全然違いました。*注：兵庫県の補助事業は、2021年度で終了しました。

仕事の確立、そして当会存続へ
会員の皆さんへアドバイス

継岩：1人で孤立してしまうのは良くないし、色々な意見を出し合える繋がりが大切だと思います。例えば自分の親が倒れたとか何かで急にセッションに行けなくなった時に、仲間に本当に助けられたし、逆に何かあったら助けてあげたいし、長く音楽療法を続けるためにはそれが必要じゃないかと思います。私も、仲間の存在があってここまでやって来られたと感じています。また、交通の便が悪い地域の療法士はなかなか研修会に参加しにくいと思います。県の大きな規模も良いけれど、出来たら地域ごとの療法士の、横の繋がりがあったらいいのかなと感じます。

鞘本：地区別研修会も、前にはありましたね。渡邊：神戸周辺での研修会開催が多く、行きたいけれど大変だという声があって、地区別研修会をやっていた時期もありました。ワークショップ、悩み相談会、自分たちが招きたい講師を呼ぶ等、地区ごとの開催の良さがありました。ただ少人数での企画は大変だということもあり、無くなってしまった事が残念です。

鞘本：コロナ禍に、地区別研修会をオンラインでも考えてはいました。小規模で自分たちでやってもいいというのがあったらいいですね。私は療法士同士の小さいアンサンブル2つに参加しています。そういうのを仲間で作ってれば、どこかで何かある時すぐに演奏できるし、練習も楽しいし。

渡邊：最近は施設の職員さんも音楽療法のことを学んでいる方もいらっしゃいます。介護職の方、音楽を使った活動で上手にお話しされるんですよ。だから、療法士は質を上げていかないと。

鞘本：音楽がどれだけできるかではなくてね、人として…渡邊：そうそう、音楽力を磨くのはもちろん、しかし音楽だけではだめで、人としての人間力・対人力を上げていかないと。そして、本当に仲間づくりですよ。人から吸収するものってたくさんあるし、助けてもらうこともあるし、私自身も仲間に恵まれてここまでやって来られたなあと思います。これからは会員同士の繋がりが広がっていくといいですね。

廣野：私は最初の認定の頃から携わらせていただいて、一人一人すごい熱量だったんですよ。その熱が今後も兵庫県音楽療法士会に伝わっていつか続いていけばいいな、と願っています。

—— 皆様、貴重なお話をありがとうございました。

●日置 暁子会員（4期・丹波篠山市在住）

日置さんは丹波篠山市の高齢者施設で長年生活相談員として勤務しながら、「入所者様の生活の活性化になれば」と音楽クラブを立ち上げ、後に音楽療法士の資格を取得されました。退職後もその活動を続けています。「一人一人を大切に、その方の隠された部分を見出し、音楽を通して再び輝かせてあげたい」という願いをもって活動している日置さん。秋の訪れを感じる10月、その様子取材しました。

セッションは大きな窓から里山を見渡せる多目的ホールで行われ、日置さんは三々五々集まって来られたお一人お一人と談笑し、そこから『里の秋』や『ちいさい秋みつけた』など季節の歌が始まりました。彼岸花の色や呼び名の話が弾む中、お一人が歌詞に曼珠沙華（まんじゅしゃげ）が出てくる歌の一節を口ずさみ、自然に歌の輪が広がりました。その方は日置さん曰く

ムードメーカーでいらっしゃるのですが、人前で歌うことを恥ずかしがっておられ、日置さんがさりげなく言葉をかけると、照れながらも背中を押されたように『岸壁の母』を見事に歌い上げました。会場は温かい拍手に包まれ、職員の方々も普段とは違う入所者様の姿を知り、感心しているようにお見受けしました。相談員という経験を活かし、入所者様へ丁寧に心を寄せ、良い所を引き出したいという日置さんの思いがひしひしと伝わってきました。

日置さんは他にも身体障害者施設、キリスト教の礼拝奏楽、地域の歌声サロンなど幅広く活躍されています。



●土橋 順子会員（19期・神戸市在住）

幼少期からピアノを習い、合奏や即興演奏の経験を音楽療法に活かしている土橋さん。音楽療法との出会いや就労継続支援B型事業所でのセッションについてお話を伺いました。

Q: 音楽療法との出会いは？

親族が利用しているデイケアで音楽レクと一緒に参加した時、参加者が笑顔になったり涙を流したりする場面に出会い、音楽が心身に作用する影響の大きさを痛感したことがきっかけでした。

Q: セッションで心掛けていることは？

緊張の強い方が多いので、それぞれがリラックスして無理なく参加できる環境を作り、音楽を通して一人一人の良い所を引き出していけるよう心掛けています。例えば、恥ずかしくて大きな声が出せない方は、発声練習で少しずつ声を出してから歌唱活動に移行しても

らい、ミュージックベルのメロディー奏では見やすい楽譜をお一人ずつ用意し、ベルは自主性を大切にしてお本人を選んでもらうようにしています。

Q: 特に印象に残っていることは？

普段他の方と関わりを持たない方がミュージックベルの演奏ではしっかりと周りの動きを目で追い、音量や鳴らし方を工夫しながら、皆を引っ張ってくれたことです。

Q: 参加された方や施設の職員の反応は？

参加された方からは「ベルの音色が好きで演奏が楽しい」、施設の職員からは「普段小さな声でしか話さない方が音楽の時間はしっかりと声を出して歌っている」「ベルを表情豊かに演奏しているメンバーさんの普段とは違う姿を見れて嬉しい」などお声をいただいています。



第11回山口陽雄記念賞授賞式



後列左から 井上 恭子会員（当会理事長）
山口 直子氏（向陽病院常務理事）
前列左から 阿部 恩氏（頌栄短期大学名誉教授）
池田 智子会員
山口 紅子氏（向陽病院名誉会長）
2023年11月4日 兵庫県福祉センターにて

今年度受賞された池田智子会員（2期）にこれまでのご自身の活動について、お話をいただきました。

一授賞式で、山口紅子先生のお言葉を聞きながら、昔のことを思い出しました。20年前、兵庫県音楽療法士の運営委員をした時は、まだ事務室などもなく、向陽病院の部屋をお借りし、お世話になりました。

私は、知的障害の方と関わる機会があり、はじめは障害者施設で音楽活動を行っていました。兵庫県音楽療法士と、日本音楽療法士学会の資格を取得した2003年以降は、高齢者、障害児・者の福祉施設で、非常勤や外部講師の立場でセッションを行いました。そして、特別支援学校に就職することとなり、それまでの仕事を同じ学びを重ねてきた仲間が引き継いでくれ、全てのセッションを継続することができました。兵庫県音楽療法士の仲間大変感謝しています。

特別支援学校での私の立場は音楽療法士ではなく、一教師です。そこでは、障害を持つ子どもたちと多くの時間を共に過ごし、一人一人のこどもたちと深く関わることができました。特に、肢体不自由の子どもたちが、音楽を通して生き生きとした表情、表現を見せる時、彼らの生きる力を強く感じました。多くの先生、音楽療法士仲間、様々な障害を持つ人々との多くの出会いによって私は音楽療法士として育てられたと感じています。

「音楽の力」で、人が勇気や希望を持てること、人として成長できること、生活を豊かにできることを、私自身強く実感しています。今後も音楽療法士として、音楽の魅力を多くの人に伝え、音楽療法の普及・発展のために、微力ではありますが、尽力する所存です。

山口陽雄記念賞：兵庫県での音楽療法の発展と当会発足にご尽力下さった故山口陽雄先生（元向陽病院理事長）が、生前、音楽療法のさらなる普及発展と、音楽療法士の士気向上を図る目的で設立された賞です。ご逝去後もご遺族がその遺志を引き継いで下さり、毎年度会員1名に授与されます。

池田 智子会員（2期）

大学卒業後、兵庫県内の高等学校、小学校等で音楽科教師として勤務。退職後、兵庫県音楽療法士養成講座を受講し、2003年 兵庫県音楽療法士、日本音楽療法学会認定音楽療法士両資格取得。2006年 当会企画部長就任（1期2年）その後、兵庫県内の特別支援学校に教師として勤務。現在は、短期大学幼児教育学科にて、音楽療法関連分野の授業を担当している。

2023年度 事業報告 I 研修会・事例研究会事業

4月・研修会

後藤 力先生 広島国際大学総合リハビリテーション学部教授
「フレイルと介護予防に必要な知識・評価および介入」

5月・研修会

中林 亜衣先生 NPO法人生涯発達ケアセンターさんれんぶ代表
「大好きな音楽と福祉を両手に
—医療的ケア児を含む全てのこどもたちの発達を後押しする音楽療法と法人運営の話—」

6月・事例研究会

岡崎 香奈先生 神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授
事例研究

7月・公開研修会

肥後 功一先生 島根大学理事・副学長
「コミュニケーション障がいへの支援 —必要な専門性とは何か—」

8月・研修会

北村 吉彦先生 ヤマハ音楽教室講師
「カホンを作って演奏にチャレンジ」

9月・事例研究会

池田 智子先生 大阪成蹊短期大学非常勤講師
事例研究

10月・公開研修会

柿木 達也先生 かきぎ認知症しあわせクリニック院長
「認知症の理解と予防・早期治療・進行抑制」



11月・公開研修会

穴戸 幽香里先生 国立音楽院音楽療法学科講師、全国心身障害児福祉財団理事
「集団音楽療法 一個人のアセスメントから集団へー 乳幼児・学齢・成人期の目的と実践内容」

12月・公開研修会

野村 誠先生 作曲家
「音楽とコミュニケーション」(鍵盤ハーモニカ講座付き)

1月・事例研究会

山田 由紀子先生 音楽療法グループ アン・ディ・ムジーク代表、西宮音楽療法研究会理事
事例研究と講義「事例研究レポートの書き方 経過と考察」

2月・公開研修会

松本 佳久子先生 武庫川女子大学音楽学部応用音楽学科教授
「『大切な音楽』の語りと対話が織りなすライフ・ストーリー」

オンデマンド配信（昨年度公開研修会）

5月 長谷川 裕紀先生 武庫川女子大学共通教育部准教授
「音楽療法におけるデータの活用を考える」

6月 嶋村 順子先生 ATI認定アレクサンダー・テクニック教師、SEI認定ソマティック・エクスペリエンシング・プラクティショナー
「自己調整～本来の自分らしさを取り戻す」

公開研修会は日本音楽療法学会の認定番号を取得する予定です。開催の告知は当会HPでご案内しております。

主催コンサート

11月23日、丹波市のポップアップホールにて『～世代を超えて～つながろう！音とひと』と題し、音楽療法士による参加型コンサートを行いました。毎年開催しているこのコンサートは、県民の方と一緒に音楽を楽しみ、広く音楽療法を知っていただくことを目的としています。

コンサートでは、童謡『どんぐりころころ』にのせて、丹波生まれのどんぐりちゃんの世界一周の旅が繰り広げられました。フラメンコ（スペイン）、ワルツ（オーストリア）、ボサノバ（ブラジル）等のリズムを体験しながら各国を回り、『マツケンサンバ』で丹波に戻ってくる、という展開。リズムが変わるだけで雰囲気はガラッと変わり、いつの間にか体が動き一緒に踊り出す方もいました。その他、フルートの三重奏では『見上げてごらん夜の星を』と『ル



パン三世』のテーマが演奏され、最後はスリットドラムに合わせて『夕焼け小焼け』を会場の皆さんと一緒に歌いました。プログラムを通して、子どもから高齢者まで幅広い年齢の皆さんと一緒に音楽の世界を楽しんでいただけたように感じました。

終了後、ロビーにて出演者全員で、『旅愁』（原曲：オードウェイ 翻訳：犬童球溪（犬童は音楽教師として1年間丹波市に赴任していたことがある））を演奏し観客を見送りました。「楽しかった」「最高！」「このような形のコンサートは初めてでした」等感想があり、涙を一杯溜めて「ありがとう」とセラピストの手を握る方もおられました。これからも多くの方に音楽療法を気軽に体験していただけるようなコンサートを開いていきたいと思っています。



依頼事業

木の芽家族会様からのご依頼

“木の芽家族会”様は「精神疾患の早期発見、早期治療の相談窓口に徹する」として、毎月定例会を開催されています。「会員家族、関係者に楽しい時間を過ごしてほしい」とご依頼を受け、6月11日兵庫県福祉センターにて、定例会の中で約1時間音楽療法を体験していただきました。音楽に合わせて軽くストレッチ、歌唱『夏の思い出』で始まり、参加者とセラピストの『太鼓問答』では、あたかもお喋りしているような音のやりとりに感心の声漏れました。曲に合わせて楽器を使う、手拍子をする…そして8人の方のトーンチャイムの音階に、キーボードで『虹の彼方に』のメロディを添えると、皆さんその響きを味わっておられました。2チームに分かれて違う2曲を同時に歌う「同時唱」では苦笑い、最後は『夏

は来ぬ』の斉唱でした。終了後、「楽しかった」、「（施設でも）音楽を取り入れたい」との声も聞かれました。家族会の皆様ご自身が、音楽を楽しまれ、明日への活力になれば、と思いました。



西宮市津門呉羽町自治会婦人部様からのご依頼

西宮市津門呉羽町自治会婦人部様より地域老人会の敬老の日のイベントとしてご依頼を受け、9月29日、西宮市立津門市民館で音楽療法体験を実施させていただきました。婦人部の代表の方は、昨年、他団体様から依頼を受けて当会が実施した音楽療法体験講演に参加され、その体験から「合奏や歌の活動

と、フルートの演奏を盛り込んだ音楽療法をお願いしたい」と具体的な依頼につながりました。始めにピアノ演奏に合わせて発声、ストレッチを行いながら、身体の可動域を広げることを体験してもらいました。そして、2つの違う曲を1フレーズずつ交互に歌う交互唱では「つられたわ」と笑いが起こり、

和気藹々とした雰囲気。それぞれ選んだ大小様々な楽器を手に『六甲おろし』を大合唱し、最後に『You Raise Me Up』のフルート生演奏と共にパーチャイムを順番に鳴らして、会場は優しい響きに包まれました。参加された方からは、「大きい楽器を鳴らして気分爽快！」等の感想が聞かれました。人生100年時代を顔馴染みの方々と一緒に歌を口ずさみ、これからも健康に過ごされますようにと思いました。



佐用町「手をつなぐ育成会」様からのご依頼～音とふれあうコンサート

佐用町「手をつなぐ育成会」様からご依頼を受け、12月2日に南光文化センターにて、お楽しみ会の中で音とふれあう参加型コンサートを行いました。昨年度、西播地域啓発総合福祉大会での当会の講演に役員様が参加され、佐用町でも「少人数で身近で音とふれあいたい」とのご希望でした。「手をつなぐ育成会」様は、知的障害者（児）の家族及び会の趣旨に賛同される方で構成される会で、発足60年余り。今ほど行政からの援助が無い頃から情報交換や助け合いの活動を行って来られました。

コンサートでは、まず一年を振り返りながら唱歌や歌謡曲を歌唱し、そして『赤鼻のトナカイ』『きよしこの夜』では太鼓やベルを用いた楽器活動を、『サンタが街にやってくる』では音楽に合わせて身体活

動を行いました。最後にクールダウンとして『いのちの歌』を鑑賞していただきました。参加された皆さまは終始笑顔で、声、体、楽器を使った音のやり取りを楽しまれていました。終了後、「歌声に癒された」、「とても楽しかった」等のご感想がありました。



明石市 肢体不自由児・者父母の会様からのご依頼～クリスマス会

「明石市肢体不自由児者父母の会」は、昨年60周年を迎えられました。「障害を持つ子どもたちにとって住みやすい社会を実現するために」と、毎月の交流会に加え、研修会やバザー、「きょうだいさんの日」等のイベントを実施されています。ご依頼を受け、12月23日、ふれあいプラザあかし西にてクリスマス会として音楽療法を体験していただきました。

「歌って踊って楽器も鳴らそう！みんな大好きクリスマス」というテーマで、6名の会員が様々な楽器を持参しそれぞれの音色を紹介することからスター

ト。40名を超える参加者と『サンタが街にやってくる』で軽体操をし、『そりすべり』ではベルハーモニーやウッドブロック、シンバルなどから参加者に好きな楽器を選んでいただき合奏をする等、クリスマスソングを中心に進めました。少し重いと思える楽器にも挑戦して、ご家族が驚かれる場面もありました。皆で音を重ねるうちに会場は温かい雰囲気になりました。参加された皆さまおよび開催に関わっていただいた皆さまに心より感謝いたします。

丹波市立前山小学校様からのご依頼

今年度閉校予定の丹波市立前山小学校で2月8日、「音楽療法って何？」というテーマでコンサートを行いました。『なんとなくなんとなく』の歌で始まり、とても寒い日だったので『さんぽ』に合わせて足踏みをし、身体を温めました。その後、「みんなはどんな時に音楽を聴く？」「音楽を聴いたらどんな気持ちになる？」と尋ねると、児童の皆さんは手を挙げて思い思いに答えてくれました。トーンチャイムや様々な小物楽器を全員に配り、フルートと共に校歌を合奏すると、自然豊かな同校の様子が優しい音色で表現されました。最後は映画『STAND BY ME ドラえもん2』の主題歌『虹』を全員で手話とともに歌唱。同校の風景や学びを表現したオリジナルの歌詞が曲中に織り込まれ、児童の皆さんはスクリーンに写った歌詞を見つめていました。

終了後、「楽しかった」「みんなで一緒に合奏できたことがよかった」との感想が語られ、この体験が「音楽療法って何？」の答えになっていたのでは、と感じます。春からは違う学校に移る児童の皆さんが、大好きな前山小学校のことを忘れずに、たくましく成長していつてくれることを祈ります。



楽器紹介 & 音楽の豆知識

●オーシャンドラム

オーシャン（海）ドラム（太鼓）は薄手の両面太鼓の内部に小粒の玉が入っていて、両手で持って傾けたり揺らしたりすると波のような音が出せる擬音楽器です。水平の状態から始めて、左右にゆっくりと傾けると、中の玉が滑るように転がり波の音を出します。大・中・小ささまざまな大きさのものが、大きさに加え、揺らす角度や速度によって、穏やかなさざなみのような音から荒れる大波のような音まで、いろいろな波の音を表現できます。また中には、`母親の胎内を思い起こさせる音色、のオーシャンドラム（REMO社）もあります。



この楽器の面白さは、音を聴くという聴覚への刺激だけでなく、玉が動くことで視覚的にも興味をひきやすく、手で持って振動も感じられるところにあります。さらに、パチで叩くなど様々な楽しみ方ができるため、音楽療法の現場でも活躍している楽器です。

右記QRコードからオーシャンドラムの音を聴けます。



●身近な「サイン音」と「サイン音楽」

電子レンジなど電化製品の稼働終了時にメロディや音が鳴りますが、このようにメッセージを伝える音を「サイン音」といいます。列車の発着を知らせる音なども「サイン音」の一つです。その中で、大阪メトロの長堀鶴見緑地線では、列車接近の際にホームに独特のメロディが流れます。この路線は1990年の「国際花と緑の博覧会」開催に合わせ、京橋～鶴見緑地間で開業しました。その際に、京橋行き（上り）の列車接近音は「♪きょうばし」、鶴見緑地行き（下り）は「♪つるみりょくち」という大阪弁のイントネーションを模したメロディで作られたのです。現在は大正～門真南に延伸していますが、偶然にも「京橋」と「大正」、「鶴見緑地」と「門真南」の文字数がほぼ同じなので、同じメロディが使われているようです。乗客の方にも違和感なく聴かれているのではないでしょうか。

また、物事を知らせる手段として音楽を使う「サイン音楽」もあります。例えば、百貨店などで雨が降ると『雨にぬれても』など特定の音楽が流れます。これにより、窓のない売り場にも雨が降り出したことが伝わり、店員がお買い上げ商品の入った紙袋にビニールカバーをかけるなどお客様に配慮ができるのです。言葉を使わずにスマートに伝えることができるのは、音楽ならではの強みかもしれませんね。これらはほんの一例ですが、このように音や音楽を効果的に使用した「サイン音」や「サイン音楽」は身近にたくさんあります。みなさんも耳を傾けて探してみませんか。

- 参考文献：『図解入門 よくわかる 最新 音楽の仕組みと科学』（岩宮 眞一郎）
- 参考資料：YouTube Osaka Metro公式チャンネル
「Metro News」 vol.57 長堀鶴見緑地線だけ異なるメロディに隠された...

information

♪ 音楽療法の実施や講演依頼等 … 事務局へお問い合わせください。

● 問い合わせ先 E-mail : jimukyoku@hmta.jp Fax : 078-261-9602



一般社団法人
兵庫県音楽療法士会

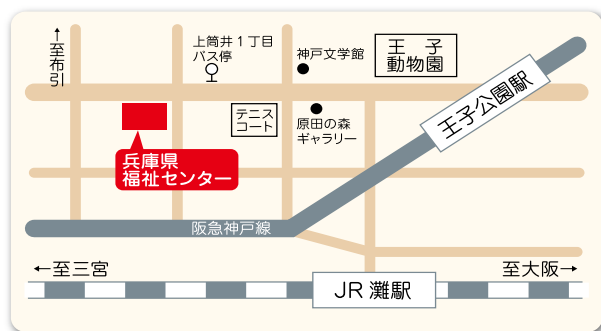
〒651-0062
神戸市中央区坂口通2丁目1-1 兵庫県福祉センター6F
一般社団法人兵庫県音楽療法士会事務局
TEL (078)261-9601 FAX (078)261-9602
E-mail : jimukyoku@hmta.jp

【アクセス】

JR 灘駅・阪急 王子公園駅下車徒歩約10分
神戸市バス(90・92系統)上筒井1丁目バス停下車すぐ

【ホームページ】

<https://hmta.jp>



ホームページでは、音楽療法に関すること、会の活動や公開研修会の案内などをご覧いただけます。



発会から20年以上、コロナも経て、私たちは新たに歩み始めています。今号は、発会当時を振り返り、その原点を先輩方にお聞きしました。さまざまな場面で、会員同士がつながり向上すること、協力して音楽療法を継続して行うこと、普及を目指すことの大切さを語っていただきました。他の記事でも、さまざまなつながりが感じられます。創刊時の広報誌のタイトルに込められた、みんなの顔が見えるセッション「音の輪」、和みの「音の和」が、これからも続きますように。発行にあたり、ご協力いただきましたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。（広報部 宇野）

